

Bernard Malamud: *The Fixer*

——歴史的必然性における個人と全体——

中 西 勝 之

バーナード・マラマッド（1914—1986）が作家としてアメリカ文学界のなかに不動の地位を確立したのは *The Fixer*（1966）を世に出して全米図書賞につづいてピューリッパ賞を獲得してからである。Leslie A. Field は *Bernard Malamud and Critics* の序文で「批評家たちはマラマッドが何をなそうとしているか当然知っておくべきだったのに、*The Fixer* が出るまでは、不幸にも多くの批評家たちが知らなかった」⁽¹⁾ と述べているように、*The Fixer* によって多くの批評家たちはマラマッド再考の必要を迫られたのである。

The Fixer が20世紀初頭の帝政ロシア末期に実際に起った Mendel Beiliss 事件を題材にしていることは Maurice Friedberg が著した *History and Imagination — Two Views of the Beiliss Case*⁽²⁾ で詳細に論じられている。この作品がマラマッドの他の作品と異なる点の一つは、彼の多くの作品がニューヨークの下街に生きる人間模様が中心であるのに、このように帝政ロシアに起った事件が題材になっていることである。たしかに、マラマッドはアメリカから再三、ヨーロッパへ舞台を広げることもあったが、しかし、その場合でも、*The Lady of the Lake*, *The Last Mohican*, *Man in the Drawer* に見られるように主人公はアメリカ人であり、今日のアメリカの社会的問題を背負った、すくなくとも影響を受けた主人公である。*The Fixer* においては、主人公も舞台も直接には今日のアメリカ的問題と表面的に結びつくことはない、がこのようにアメリカにとどまらず、題材を世界的な視点からとらえようとするところに

普遍的な問題に辿ろうとするマラマッドの創作意欲の一端を窺うことができる。

この作品はマラマッドの他の複雑な構成の作品に比べると Sheldon J. Hershinow も指摘するように「もっとも複雑さに欠けた明解な筋の物語」⁽³⁾ である。無実でありながらユダヤ人であるが故に、キリスト教徒の少年殺しの罪に問われ、あらゆる拷問と迫害を受けねばならない歴史的、社会的必然性のなかで個人は何をなし得るのか、個人とは何かを作者は問いかける。人は真に自由に解放されるためには受難を経なければならないというマラマッドの一貫したテーマの追求は、ここでも明解に示されているが、個人が全体〈社会〉と真っ向から対立した形で追求されるのは、彼の他の作品には見られないこの作品の特質と思われる。マラマッドの作品の主人公は反英雄的で、平凡なとるに足りない、社会の底辺で慎ましく生きる人間であり、そのテーマとなる受難は、多くの場合、ユダヤ人としての稟質をもった登場人物が生と死を見つめて生き抜くなかで自己の identity を追求する過程で生じる受難である。

本論ではマラマッドの創作技法の特質を分析しながら、歴史的必然性における「個人と全体」を中心にマラマッドの文学における個人と全体観の本質を探ってみたい。

(1)

The Fixer の主人公ヤーコフ・ボークは *The Assistant* の主人公フランク・アルパインと多くの点で類似している。二人とも生後間もなく母親と死別し、幼少の頃父親を失い孤児院に預けられ、放浪の少年時代を過ごす。ヤーコフがユダヤ人であり、フランクがイタリア人であることを除けばヤーコフはフランクに生き写しである。

すでに30歳を過ぎたヤーコフは、さびれたユダヤ人村 (Shtetl) で修理屋 (handyman) の仕事をしながら貧しい生活を送っている。数年前に結婚し

た当時は、二人で金を貯えて新らしい自由の世界アメリカへ渡ることが夢であった。子供ができないことから、妻は他の男と不倫の駆け落ちをして、ヤーコフは、いまではまったく孤独のまま妻の帰りを待っている。壊れたものはなんでも修理するのが仕事であるヤーコフは壊れた自分の家庭を修理できないまま、11月の初旬のある金曜日に、新たな生活を求めて旅に出る決心をする。すべての家財道具を売り払って16ルーブルを手にしたヤーコフは妻の父親である義父シュムエルの再三の制止にもかかわらず、老いぼれた瘠せ馬にボロ車を引かせてユダヤ人村を去ってキエフの街へ向う。

‘I’ve been cheated from the start,’ Yakov said bitterly. ‘What I’ve been through personally you know already, not to mention living here all my life except for a few months in the army. The shtetl is a prison, no change from the days of Khmelnitsky. It moulders and the Jews moulder in it. Here we’re all prisoners, I don’t have to tell you, so it’s time to try elsewhere I’ve finally decided. I want to make a living. I want to get acquainted with a bit of the world. I’ve read a few books in recent years and it’s surprising what goes on that none of us knows about. I’m not asking for Tibet but what I saw in St Petersburg interested me. Whoever thought of white nights before, but it’s a scientific fact; they have them there. When I left the army I thought I would get out of here as soon as possible, but things caught up with me, including your daughter.’⁽⁴⁾

自分が生まれ育ったこのユダヤ人村はヤーコフにとっては「墓場」(p. 10)であり、望みのない不毛の地としての「牢獄」を意味する。これは *The Assistant* において、モリスの店が「墓場」であり「牢獄」であることと類似する。*The Assistant* ではフランクは「外側」から、この店という「牢獄」の「内側」に入って来るが、*The Fixer* ではヤーコフは「外の世界 (outside world) で一財産を築く」(p. 14) ために、このユダヤ人村

という「牢獄」から「外」へ向って出て行かねばならない。これは *The Lady of the Lake* において、夢を求めてニューヨークからヨーロッパへ脱出するヘンリー・レヴィンの場合を想起させる。ユダヤ人村という「牢獄」に捕われた囚人ヤーコフにとって、村からの脱出は「出エジプト」(the Exodus) であり、キエフというロシアのエルサレム (the Jerusalem of Russia) への旅立でもある。

ヤーコフが故郷を脱出する理由は、どんなに苦勞して働いても「墓掘人の一歩手前まで落ちぶれて——自分より能力のない連中よりも貧しい生活費しか稼げなかったからであり、さらに、自分に子供がなく妻に逃げられた亭主として苦汁をなめさせられていたから」(p. 21) である。子供のない亭主はタルムードによれば「死んだも同然」なのである。しかし、もし妻が貞節であり不倫を犯して逃げ出さなかったら、彼はいつまでも、不毛の地にとどまっていたに違いないし、ユダヤ人村という「牢獄」からの脱出は永久にあり得なかったかもしれない。実際、妻のレイスルが逃げ出した理由は二人に子供ができなかったことと、この不毛の地を離れて新しい世界へ出ようというレイスルの再三の要求にもかかわらず、ヤーコフがこの「墓場」から動こうとはしなかったことにある。結局、妻に逃げられた不運は、すなくともこの時点では、ヤーコフにとっては彼の自由への解放の動機となり、「出エジプト」を招来するもので、幸運をもたらすことになる。〈しかし、この幸運は投獄という、さらに大きな不運をもたらすが〉。物事は、つねに表裏一体となっており ambivalence の状態であるのがマラマッドの世界である。

しかし、ヤーコフがいくら働いても報いられない不毛の世界で、さらに苦難を背負わねばならない不幸の元凶とは、一体何なのか。故郷を牢獄として捨てねばならない根本原因は一体何なのか。それは彼がユダヤ人として生まれユダヤ人共同体のなかで育ち、そこに生きていることにある。ヤーコフにとってユダヤ人として生まれユダヤ人村に住むことが、そのまま

牢獄のなかの囚人を意味する。したがって、牢獄からの脱出はヤーコフ自身の identity の否定であり、*The Lady of the Lake* のフリーマン（レヴィン）と同じく、己れの identity を否定することによってヤーコフは意識的に解放されることを試みる。ユダヤ人村脱出という「出エジプト」はヤーコフの精神的自由への解放なのである。

‘Yakov,’ said Shmuel passionately, ‘don’t forget your God!’

‘Who forgets who?’ the fixer said angrily. ‘What do I get from him but a bang on the head and a stream of piss in my face. So what’s there to be worshipful about?’

‘Don’t talk like a meshummed. Stay a Jew, Yokov, don’t give up our God.’

‘A meshummed gives up one God for another. I don’t want either. We live in a world where the clock ticks fast while he’s on his timeless mountain staring in space. He doesn’t see us and he doesn’t care. Today I want my piece of bread, not in Paradise.’

‘Listen to me, Yakov, take my advice. I’ve lived longer than you. There’s a shul in the Podol in Kiev. Go on Shabbos, you’ll feel better. “Blessed are they who put their trust in God.”’

‘Where I ought to go is to the Socialist Bund meetings, that’s where I should go, not in shul. But the truth of it is I dislike politics, though don’t ask me why. What good is it if you’re not an activist? I guess it’s my nature. I incline towards the philosophical although I don’t know much about anything.’ (p. 19)

「神を忘れちゃいかんよ」というシュムエルの助言に対し、ヤーコフは「神が俺にしてくれることは頭をぶんなぐるか、顔に小便をひっかけるぐらいで崇拝できるだけの何がある？」と答える。神の選民としてのユダヤ人が、事実上、地上で一番最低の生活を強いられ、もっとも長く、もっと

も苦しまねばならない不合理にヤーコフは神に疑念を抱きユダヤ人としての自己から逃げようとする。「俺の行くべきところはユダヤ教会堂ではなく社会主義者の集団」なのである。

住みなれた故郷を捨てることはヤーコフにとって過去から現在に至る自己の一切を捨て去ること、ユダヤ人共同体から個人としての自己を切り離すことを意味する。彼はキエフへ向う途中、ドニエープル河を渡る船の上からシュムエルが贈ってくれた聖句箱入れの袋を川のなかに沈めてしまうが、これはヤーコフが神を見捨て、ユダヤ人であることから自分を切り離すことを必然的に強いられていることを象徴している。

(2)

憧れの聖地キエフに着いたヤーコフはユダヤ人居住地区に、しばらく身をひそめる。意識的にはユダヤ人であることから逃げようとしながら身の安全からユダヤ人共同体のなかに身を置かねばならないところに、いぜんとしてユダヤ人としての自己から脱却できないヤーコフの自己矛盾の姿を見ることができる。

修理屋は道具袋を肩に仕事を探しまわるが、ほとんど収入は得られない。夢と希望の挫折である。ユダヤ人村という「牢獄」から逃れてきた囚人は、精神的にさらに悪い「牢獄」の囚人になってしまったのである。現状よりも、もっとよい条件を求めながら、逆に現状よりも悪い状態に落ちこんでいくのがマラマッドの特技とするアイロニーの世界でもある。ヤーコフは故郷へ戻るか、自殺するか二者択一を迫られる。だが「幸運をつかむためには忍耐が必要だ」(p. 34) というラトケの助言どおり、ヤーコフは、ある雪の降る夜、路上に行き倒れになった老年のロシア人を救うことから思いがけない幸運をつかむ。この男は煉瓦工場の経営者で、助けてもらったお礼として、住込みで月給45ルーブルでヤーコフを雇いたいという。ヤーコフはこの男が黒百人組と呼ばれる過激な反ユダヤ主義者である

ことから、はじめは躊躇するが45ルーブルの高給に将来の夢を託して、自分がユダヤ人であることを隠しヤーコフ・イワーノヴィッチ・ドログーシェフという偽名を使って働くことになる。

Nikolai Maximovitch rose slowly, an old man with wrinkled, red-rimmed, wet melancholy eyes, and welcomed Yakov without embarrassment. The fixer, thinking of his Black Hundreds button, felt for him contempt, and a portion of the same for himself. His throat tightened. Though he wasn't trembling he felt he might be.

‘Nikolai Maximovitch Lebedev,’ the fat Russian said, offering his soft pudgy hand. A thick gold watch-chain hung on his paunch, and his vest was dusty with snuff grains.

Yakov, after a slight hesitation, shook hands, answering as he had planned, ‘Yakov Ivanovitch Dologushev.’ To have given his name might have finished off the reward. Yet he felt ashamed and sweaty. (p. 37)

ヤーコフは過激な反ユダヤ主義者であるこの経営者を軽蔑するが、同時に自己嫌悪に落ちいらねばならない。ユダヤ人である自分から逃げたいという意識のなかで、反ユダヤ主義者に雇われるために偽名を使わねばならない自分に屈辱を感じる。恋の夢を実現させるためにレヴィンをフリーマンと偽る *The Lady of the Lake* の主人公よりも状況は、さらに陰惨で深刻でありヤーコフの心は屈折している。「人間は隠せば隠すほど自己嫌悪に落ちる」(p. 41) のである。

ヤーコフの仕事は煉瓦工場の工場長の不正を取締る監視役である。ユダヤ人居住禁止区で、しかも、偽名を使って、いつ身分が暴露して窮地に追いこまれるかわからない危険な状況で、いわば、つねに官憲の監視の眼を盗んで生きるヤーコフが、こともあろうに工場長の監視役につくところにマラマッドの創作技法の一つであるアイロニーの世界がある。ヤーコフは、

いく度となく自分の身分を告白し工場を逃げ出そうと思うが、やっと手に入れた職と未来への冒険心から逃げ出せないままである。ここでは過去と現在を捨て、未来のなかに生きようとするヤーコフの姿が見られる。

過ぎ越しの祝の夜、雪のなかで一人のユダヤ人の老人が子供たちに投石され傷ついているのを見て、ヤーコフは老人を自分の部屋に入れて傷の手当をする。老人の祈る姿を見て、ヤーコフは捨てたつもりのユダヤ人意識に目覚め動揺する。ここでは、過去を捨て切れない自己——ユダヤ人共同体から切り離せない自己をヤーコフのなかに見ることができる。老人を帰したあと、ヤーコフは近くの12歳のキリスト教徒の少年が惨殺されたというニュースを知る。ユダヤ人が過ぎ越しの祝にキリスト教徒の血を使うため少年を殺したという噂である。ヤーコフは自分がユダヤ人であることの身の危険を感じ逃げ出そうとするが、少年殺しの容疑で逮捕され収監される。故郷のユダヤ人村という精神的「牢獄」は、いまや、ヤーコフにとってキエフ警察署の地下室のなかの現実的な「留置場」になる。

(3)

ここからストーリーは2年半にわたるヤーコフの悲惨な獄中生活の詳細な展開に終始する。この作品の四分三以上が監房のなかでのヤーコフの頑固な抵抗と忍従の闘い、いわば、自己對自己、自己対共同体(ユダヤ民族)、自己対国家(ロシアを含む、非ユダヤ社会)との壮絶な闘いにおける受難の描写である。陰気な地下室の留置場のなかで、ヤーコフは手錠をはめられ雪の降る街のなかを群衆の非難を浴びながら追いたてられてきた自分の姿を想い浮かべる。

‘My God, what have I done to myself? I’m in the hands of enemies!’ He hit his chest with his fist, bewailed his fate, envisioned terrible things happening to him, ending by being torn apart by a mob. Yet there were also moments of sudden

hope when he felt that if he only *explained* why he had done what he had done, he would be at once released. He had stupidly pretended to be somebody he wasn't hoping it would create 'opportunities', had learned otherwise—the wrong opportunities—and was paying for learning. If they let him go now he had suffered enough. He blamed also egotism and foolish ambition, considering who he was, and promised himself it would be different in the future. He had learned his lesson—again. Then he jumped up and cried aloud, 'What future?' but nobody answered. (p. 68)

ヤーコフが実際に犯した罪は「少年殺し」ではなく「ユダヤ人でないと偽ってユダヤ人居住地区に住んだこと」だけである。自分は本来の自分とは別の人間であると装うことによって、未来への「機会」をつくり出そうと望んだ。だが、その「機会」は逆に作用して、いま、その報いを受けているのだ。「天に吐いた唾が自分の顔にふりかかった」のである。ヤーコフは二度とこんな愚行をやるまいと反省する、が同時に、「では、どんな将来があるというのだ？」と反問する。ヤーコフにとって、「自分を偽って行動する」以外に将来を望むことのできない「自分の置かれた立場」から、すべては必然的に生じた結果なのである。「自分の置かれた立場」とは「ユダヤ人であること」を意味するが、マラマッドは一個人がユダヤ人として必然的に生きることを意味をあらためて問いかける。監房のなかで尋問に当たった好意的な捜査官ビビコフとスピノザについて論じるなかで、ヤーコフは「だれも望まないのに必然と呼ばれるものが、つねに存在していて、人間はその壁にぶつかるしかない」(p. 72) というスピノザの哲学を口にする。必然に縛られた人間を自由にしてくれるのは人間の思考であり、それは神を信じることであるという哲学もヤーコフには理解できる。なのに、故郷を捨て、神を捨てなければならなかったところにヤーコフの屈折した実存の意味がある。

ヤーコフの殺人容疑に関する調査は官憲の手によって進められるが、すべて、ヤーコフが有罪となるような不利な状況証拠が固められてゆく。自分を偽った罪は不問にされるが、それ以外の二つの件でヤーコフは告発される。その一つは煉瓦工場の経営者の娘ジナイーダを暴行しようとした容疑であり、もう一つは子供たちに投石されて血を流しているユダヤ人の老人を親切心から助け、部屋で介抱してあげたことに原因する。事實は、女性の方からヤーコフを誘惑し性的交渉を迫ってきたのであり、ヤーコフは足が不自由なこの女性に同情し、一旦これに応じるが彼女が月経であることに気がつき、ユダヤ教では月経は「不浄」という教えから交渉を中止したのであった。自尊心を傷つけられた女性はヤーコフを公然と暴行罪で告訴する。後者の場合、老人の傷の手当をするため包帯として使った血のついたヤーコフのシャツと、その老人のマツオのバッグが彼の部屋で見つかり、それがキリスト教徒の血を過ぎ越しの祝に利用するとされるユダヤ教狂信者の陰謀にヤーコフが加担した証拠品としてあげられる。いずれも、ヤーコフにとっては、ユダヤ人的良心（同情、親切、宗教的習慣）から避けられ得ない必然的なものである。

ユダヤ人であることを捨てたはずのヤーコフがユダヤ人的良心を働かせたばかりに、いまや、その善意の結果が殺人犯としての有罪の証拠として逆用されているのである。しかも、「こんなことは自分よりもユダヤ教に忠実な者に起って当然だった」(p. 140) のに、すこしでもユダヤ人共同体から離れようとするなかで、ヤーコフは、逆に、非道徳なユダヤ教正統派の狂信者の一味としての罪に問われなければならない。ユダヤ人共同体から離れようとするほど、ますます、ユダヤ人的なものに深くかかわってしまう。言い換えればユダヤ人的要素の自己の本質から離れようとするほど、ますます、ユダヤ人的自己の本質へ深まってゆく。このように、皮肉、パラドックス、二重性の要素がマラマッドの特質であると同時に、個人と全体に対するマラマッドの視点でもある。

(4)

留置場に1ヶ月間拘留されたあと、ヤーコフはキエフの別の監獄へ移される。ヤーコフを殺人犯に仕立てるため、検事はヤーコフを強迫しあらゆる拷問にかけて罪を告白させようとする。ヤーコフは自分がユダヤ人であるが故に、殺人者にされてしまう危険と同時に、監房内での生命の危険すら感じる。仲間の囚人を含め周囲はすべて敵である。無実をはらそうと、あらゆる策を講じれば講じるほど、ヤーコフにとって事態は悪くなる。彼は、ついに独房に入れられる。

すべてが敵であるなかで、捜査部長ビビコフだけは事件の真相を追求する人物——ヤーコフにとっては、いわば、命綱となってくれる人物である。ヤーコフはビビコフによって、少年殺しの真犯人は少年の母親とその仲間の強盗の一味であることを知らされる。さらに、担当の検事も真犯人を知っているが、ユダヤ人全体に罪を負わせるほうが帝政ロシアにとって都合がいいという政治的意図をもっていること、したがって、ヤーコフの無実を立証する方法は新聞報道に広く訴える以外にないことを知らされる。「世のなかには裏があることは知っていたが、これが真相だった」(p. 155) ことをヤーコフは知って愕然となり、個人は必然的にこの世(全体)に巻きこまれないではいられないのだというスピノザの定義を改めて実感する。真相を知らせてくれたビビコフは、その後、公金横領の無実の罪でヤーコフの隣りの独房に投獄され、数日後に首つり自殺をはかる。

ヤーコフを宗教上の儀式による殺人犯に仕立てるための論証ができないまま、検察当局は裁判所への起訴を遅らせ、ヤーコフは2年半を独房に幽閉されたままである。ヤーコフに罪を自白させるか、さもなければ、独房で自滅させようというのが当局の狙いである。拷問、飢え、毒、鼠と油虫の死骸の入ったスープ、赤痢、凍死しそうな酷寒、精神錯乱に苦しみながら、ヤーコフは非人間的で獣同然の残忍な虐待を受ける。残酷な迫害は日

を追って増し、一日に三度の屈辱的な点検を受け、それ以外は鎖に繋がれたままである。苦しみから逃れようと再三自殺を考えるが、自滅は相手の望むところであり、「自分から手伝ってやる必要はない」(p. 245) のである。ヤーコフの抵抗は人間としての尊厳を死守することであり、残された道は苦しみに耐えて生きるしかない。

この苦しみから逃れる方法が検事によって提示される。一つは、ヤーコフが「同じ宗派の者に説得されて殺人罪を犯したという内容の告白書に署名すること」(p. 203) によって自由になれるというのであり、もう一つはロシア皇帝が大赦を与えるので、ヤーコフが望めばその恩恵を受けることができ、秘かに国外へ脱出させてやるというのである。ここでは、個人と全体に対するヤーコフの姿勢が問われていると同時に、決断を迫られる感動的な場面である。ヤーコフは両方とも拒否する。

To the goyim what one Jew is what they all are. If the fixer stands accused of murdering one of their children, so does the rest of the tribe. Since the crucifixion the crime of the Christ-killer is the crime of all Jews. 'His blood be on us and our children.'

He pities their fate in history. After a short time of sunlight you awake in a black and bloody world. Overnight a madman is born who thinks Jewish blood is water. Overnight life becomes worthless. The innocent are born without innocence. The human body is worth less than its substance. A person is shit. Those Jews who escape with their lives live in memory's eternal pain. So what can Yakov Bok do about it? All he can do is not make things worse. He's half a Jew himself, yet enough of one to protect them. After all, he knows the people; and he believes in their right to be Jews and live in the world like men. He is against those who are against them. He will protect them to the extent that he can. This is his covenant with himself. If God's not a man he has

to be. Therefore he must endure to the trial and let them confirm his innocence by their lies. He has no future but to hold on, wait it out. (pp. 245-246)

一人のユダヤ人の生き方がユダヤ人全部の生き方になる。嘘の自白をして個人的に身の自由を得ることはユダヤ人（共同体）の全体を不利にすることであり、さらに精神的に自己を強固な「牢獄」にとじこめることになる。自分がユダヤ人として生まれたために、非ユダヤ人の敵と做されるなら、自分の力の及ぶかぎりユダヤ人を護ってやらねばならない。「苦しまなければならないのなら、その苦しみを何かに役立てたい」、それがヤーコフの「自分との契約」なのである。受難はマラマッドのテーマであるが、受難は人生につきものであり、人間は受難を有意義にすることができる。ヤーコフは「自分が多くの受難を受けることで、他人の受難をすくなくする」ほうを選ぶ。さらに、大赦を受ければ、身の自由は得られても無罪として自由になるのではなく、有罪のまま釈放されることになる。そこでは身の自由は得られても精神的な自由は得られない。己れを偽り不正を許すことは人間としての尊厳を失うことであり、それは人間全体の否定を意味する。「神が人間でないとなれば、ヤーコフ自身が人間にならなければならない」。

すべての提案を拒否したヤーコフは、すべての自由を剝奪される。看守以外の人間との交わりを一切断たれ、自分の意志を完全に封じこめられたなかでヤーコフに残された唯一の人間の条件はひたすら耐えること、耐えることによって抵抗し人間としての尊厳を守り抜くことである。

(5)

ビビコフの死で絶望視されていたヤーコフの裁判は弁護士のリリアス・オストロフスキーの手によって希望がもたらされる。ヤーコフはシュムエルが死んだこと、ヤーコフ事件が世界的な関心を集め、救済の手が講

じられていることを知らされるが、同時に、このヤーコフ事件が「近代ロシアの歴史的挫折」(p. 275) と深くかかわっていることを知る。「私はたった一個の人間にすぎないのに連中は私から何がほしいのだ？」(p. 276) というヤーコフの質問に、弁護士は「一個の人間でもユダヤ人は人を殺したがることを実証しさえすればいい」(p. 276)「君はわれわれすべての人間のために苦しんでいるのだ」(p. 273) と答える。ある事件が起こると、それは当人以外のところで事件という「くもの巣」を広げることがヤーコフは学びとる。個人は好むと好まざるとにかかわらず、必然的に全体〈社会〉とかかわりをもつもので、全体から遊離した個人はあり得ない。ここでは、個人と全体は表裏一体をなして「別もので同一のもの」というパラドックスの要素をマラマッドは立証しようとしている。

裁判所へ出頭する前夜、ヤーコフは夢のなかでビビコフに会う。「自由の目的とは自由を他人のために創りあげることだ」(p. 286) というビビコフの言葉に、ヤーコフは「私の内面のあるものが変化して、もはや私は以前の私ではありません。前より怖れなくなり、憎しみを抱いています」(p. 286) と答える。ここでは精神的に再生した積極的なヤーコフの姿が見られる。ビビコフはヤーコフのもう一つの精神的幻影と思われるが、S. J. Hershinow が指摘するように「*The Fixer* の中心的アイロニーはヤーコフ・ボークが殆んど耐えられないほどの獄中生活を耐えることによって自由とは何かを学びとる」⁽⁵⁾ ところにある。ヤーコフは獄中における受難をとおして精神的な自由を勝ちとるのである。

この作品はヤーコフが裁判所に出頭するところで終る。有罪か無罪かは未決のままであるところにマラマッドは想像の世界を拡大させる。社会に生きる一個人の権利として「裁判所で自分の無実を主張すること」が重要なのである。裁判所は絶対的なもの、人が身を任せられるもの、いわば、「神」を象徴する。裁判所が正義であれば、ヤーコフは無罪となるだろうし、裁判所に正義がなければ有罪となるかもしれない。しかし、「有罪か

無罪」かは神が決定するもので、もはや決定的な要素ではない。ヤーコフは「無罪か有罪」かの形式上の判決を超越した「自由の心」を受難をとおして獲得しているのだから。

ヤーコフは裁判所へ向う途中、幻想のなかでロシア皇帝と対話し、皇帝の歴史的責任を厳しく糾弾する。それは統治者としての責任よりは、一個の人間として慈悲の心、弱者に対する敬意と洞察力に欠ける責任である。ヤーコフは皇帝の胸に銃弾を打ちこむことによって復讐をはたす。

‘Don’t expect me to beg.’

‘this is also for the prison, the prison, the six daily searches. It’s for Bibikov and Kogin and for a lot more that I won’t even mention.’

Pointing the gun at the Tsar’s heart (though Bibikov, flailing his white arms, cried no no no no), Yakov pressed the trigger, Nicholas, in the act of crossing himself, overturned his chair, and fell, to his surprise, to the floor, the stain spreading on his breast.

The horses clopped on over the cobblestones.

As for history, Yakov thought, there are ways to reverse it. What the Tsar deserves is a bullet in the gut. Better him than us.

The left rear wheel of the carriage seemed to be wobbling.

One thing I’ve learned, he thought, there’s no such thing as an unpolitical man, especially a Jew. You can’t be one without the other, that’s clear enough. You can’t sit still and see yourself destroyed.

Afterwards he thought, Where there’s no fight for it there’s no freedom. What is it Spinoza says? If the state acts in ways that are abhorrent to human nature it’s the lesser evil to destroy it. Death to the anti-Semites! Long live revolution! Long live liberty! (p. 299)

ヤーコフが学びとった一つは「政治に無関心な人間は存在しない」ことであり「政治に関心がなくては人間ではあり得ない」ことである。個人は黙って坐りこんでいれば押しつぶされてしまう。2年半にわたって牢獄に幽閉され、あらゆる虐待を強いられ迫害を受けたヤーコフは法廷へ向う途中の馬車のなかで、「やっと動きによる救い」(p. 293)を感じ「法廷へ向って動き出す」のである。ヤーコフが「前よりも怖れなくなり、憎しみを抱き」銃弾をもって「復讐する」のは、すべて「動きによる救い」を見出し得たからであり、この「動き」は個人として全体〈社会〉に積極的にかかわりをもつヤーコフの能動的な姿勢を象徴している。不条理な裁判で「犬のように」殺されるカフカの *The Trial* のユダヤ人主人公ヨーゼフ・Kの「負の存在」に対して、ヤーコフは積極的に生を希求する「正の存在」であり、Helen Weinberg が主張する Active hero 「能動主義的主人公」⁽⁶⁾ としてとらえることができる。

歴史的必然性はスピノザを自由にし、ヤーコフを監獄にとじこめた。スピノザは思索によって宇宙に達したが、監獄のなかにとじこめられたヤーコフの思想は受難をとおして現実という生きた社会に向って飛び出してゆく。「社会において自由な人間とは隣人の幸福や知的解放を積極的に助長することに関心をもつこと」(p. 73) であり、「政治をとおしてよくしなければ人をよくすることはできない」(p. 73) というスピノザの思想をヤーコフは獄中で実体験するのである。

(6)

マラマッドは創作において様々な要素をとり入れる。The Fixer の筋は明解であるが、アイロニー、パラドックス、並列、イマジネーション、シンボリズム、アレゴリカルな要素をもって複雑に構成されている。支配者の権力によってスケープゴートとして獄中に「抑圧される」ヤーコフは、その受難のなかから自由を勝ちとるが、逆に「抑圧する」側の支配者はヤ

ーコフを法廷に出頭させるために、捜査官ビビコフ、看守のコギン、馬上の若い衛兵の三人を犠牲にして、さらに国家社会そのものの混乱と破局を予期しなければならない。このように加害者は、いつのまにか被害者になってしまうが、これは短編 *The Mourners* のケスラーとグルーバーの関係に類似している。

ヤーコフはキリストと旧約物語のヨブを原型としていることは多くの批評家が指摘するとおりであるが、スケープゴードの祖型として十字架にはりつけられたキリストのように、独房のなかで両腕をのぼしたまま壁に鎖ではりつけられるヤーコフは「自分個人のための行動ではなく人間全体のための行動」を意識する。S. J. Hershinow が述べるように、「マラマッドはヤーコフが自分の苦しみで他人の罪を償うキリスト教的人物になったことを暗示しているのではなく、キリスト教に限定しない倫理的洞察を与える手段として、この並列をアイロニカルに用いた」⁽⁷⁾ のである。

さらに、ヨブとの対比においては、「神と個人的に契約した」ことで、つねに神を頼ることができるヨブに対して、ヤーコフは神を捨てているので神を頼ることはできない。Alan W. Friedman が指摘するように、「ヨブの立場は心理的に適当な時期に神の中止命令が出されるようになっているので絶望はあり得ない」⁽⁸⁾ のである。一方、ヤーコフの世界はコントロールのできない、まったくの孤独の世界である。神と絶縁したヤーコフは「他人〈全体〉を護るために抵抗する」ことを「自分と契約」することによって自からを慰め、スピノザが求めた憧れの「自由」を獲得することができる。ヤーコフは Friedman が反英雄として定義するように「神を拒絶しながら、自分および自分の人生のなかになにか確信できるものを見出すが故に新しいヒーローの典型——無意味さ、独善的世界、無力と不適応性の状況にありながら、それに立ち向って耐え抜くが故に勝利を獲得する新しいヒーロー」⁽⁹⁾ なのである。

「牢獄」がユダヤ人とその歴史のメタファーであることは、これまで再

三にわたって論じられてきたが、Robert Alter は、この作品が芸術的一貫性を確保している主な理由は「中心的メタファーと物語上の事実が作品のなかで完全に一致しているからだ」⁽⁴⁰⁾ と主張し、マラマッドの描く「牢獄」は単に倫理的で形而上学的なものを意味するばかりではなく、リアルなものを描いていることを強調する。*The Fixer* ではユダヤ人であることは特別な運命にまきこまれることであり、その民族の歴史と同一視されている。Maurice Friedberg は、とくにこの点に注目して「マラマッドは歴史を芸術的想像に蒸留させることで優れた名匠としての着実な筆跡を見せている」⁽⁴¹⁾ と絶賛する。

さらに文体上の面では、タルムード的類語反復がしきりに用いられ、同時に、幻想と夢の世界がマラマッドの表現をいっそう多様化し、深遠な世界を構築している。ヤーコフが故郷を出るときに車をひかせる老いぼれた瘠せ馬は、まさに、ユダヤ民族そのものを象徴しているが、ショーロム・アレイヘムの *Fiddler on the Roof* の主人公テヴィエとその馬にまったく一致している。

(7)

マラマッドは受難をとおして個人の精神的成長と再生に至るテーマを一貫して追求する。その個人は己れの内面に深く入りこみ、己れと神、己れと良心の葛藤のなかから救いを見出す場合が多い。しかし、*The Fixer* においては個人が内面に深く入りこむと同時に、個人の意志を外部〈社会〉に対して、はっきりと行動で示す。ここでは個人が全体と対立すると同時に、一体となっているところに彼の他の作品に見られない特質がある。

ヤーコフは *The Lady of the Lake* のフリーマン、*The Assistant* のフランクと同じく、過去と現在から逃げ出し、未来（夢）から出発しようとする。ヤーコフが過去と現在から逃げ出すことは、フリーマンの場合と

同じく、ユダヤ人村という「牢獄」〈ユダヤ民族とその歴史〉から逃げ出すこと、すなわち、ユダヤ人共同体から自己を切り離すことであり、これは自己否定を意味している。自分がユダヤ民族の一員であることを意識しながら、そこから逃げようとするのは、その民族的精神の共同体としての identity を自己のなかに認めながら、なおもユダヤ人としての個人の identity を否定するという自己矛盾をおかしていることになる。共同体としての identity から切り離れた個人的 identity は存在しないのである。フリーマンの場合と同じく、ヤーコフの悲喜劇性は、まさに、この矛盾のなかにある。ユダヤ人村という精神的な「牢獄」からの脱出はキエフの現実的な「監獄」への拘束となり、しかも、宗教的な儀式上の殺人犯として、自からその民族（共同体）のスケープゴートとならなければならない歴史的必然性を背負っている。

ヤーコフは全体から逃げようとするほど自分の個のなかに全体を意識し、過去の歴史的必然性から逃げることはできない。逆に全体から逃げようとして全体のスケープゴートとして投獄され、その全体の力によって己れの個人として人間性を回復しなければならない、ヤーコフは獄中の受難をとおして、「自分がユダヤ人として歴史から逃げるべきではなく、ユダヤ人を護ってやらねばならないこと」を自分と契約し、全体のなかに真実の自己を見出すことができる。ヤーコフが妻の不倫によって生まれた子供を自分の子供として認知することはヤーコフのユダヤ民族への帰属とユダヤ人村での「家庭」の再生を意味しているが、ヤーコフはユダヤ人としての自己に目覚め、ユダヤ民族共同体との強力な精神的な結びつきを回復することになる。*The Lady of the Lake* のフリーマンと同様、ヤーコフはユダヤ人である自分（過去、現在）を捨て、キエフ（未来）から出発するが、受難を経て再びユダヤ人である自己（過去に根ざした現在）にもどってくる、『*The Lady of the Lake* における Identity の追求』でも指摘したように、マラマッドは「過去を捨てて現在には存在し得ないし、

未来も存在しない。過去に根ざした現在の自己を自覚し、そこから出発するとき未来が開かれる」⁽¹²⁾ ことを再び示唆している。

個人は物理的に全体から離れることはできても形而上学的に全体から離れられない。個人と全体は時間的かつ空間的に表裏一体をなして流動的である。すなわち、個人は生まれた時点から歴史的必然性のなかで全体的なものを含み、全体とは別個の存在であると同時に同一でもある。したがって個人は自己を追求すればするほど自己のなかに全体性を意識するようになる。そういった必然性のなかで、個人が個人としての機能をはたすのは個人が全体のなかで自由に解放されるときである。その自由への解放は個人の意識、思想のなかにあり、その目的は「全体のために自由を創り出すこと」にある。

ユダヤ人村という「牢獄」を出てキエフの「牢獄」に入り、受難をとおして自由を得たヤーコフは、結局、全体と自己から逃げることにより全体を求め自己を積極的に求める能動的な人間に容変したことになる。こうしてヤーコフは「政治的に無関心な人間は存在し得ないし、政治に関心がなくは人間ではない」という結論に達する。個人の内面に深く沈みながら受難を経て精神的再生に至る *The Lady of the Lake* のフリーマンや *The Assistant* のフランクから一步「外」へ向って能動的に動き出したヤーコフのなかに人間として精神的に大きく変容した姿を認めることができる。

マラマッドは短編作品のなかで「自己と他」をテーマにして追求している。*The Death of Me* の店主マーカスと二人の使用人ジョウシップとエミリオ、*Take Pity* のローゼンとエヴァ、*The Bill* のパネサとウィリーの関係は、いずれも自己を犠牲にして相手を救済し、自から精神的再生に至るが、この場合、個人はユダヤ民族としての identity をもつ歴史的必然性のなかで社会、国家と政治的にかかわりをもつのではなく、あくまで個人対個人のかかわりが中心である。こういった点から、マラマッドの

作品は一般に社会性、政治性に乏しいと評される傾向があるが、*The Fixer* は歴史的背景における政治と真っ向から対決しながら個人と全体のテーマを深く追求した作品といえる。Iska Alter は *The Fixer* を「歴史の拡大な瞑想」⁴³ と評しているが、この作品は単にロシアにおける歴史的事件の語録としてではなく、不正に対する世界的な問題を提起している。S. J. Hershinow が *The Fixer* を「アメリカにおける不正の追求と同時に現代アメリカに対するメタファであり、20世紀におけるすべての人間に共通する生存の苦しみを表現している」⁴⁴ と評する根拠は、今日のアメリカだけでなく広く世界がその病根として抱えている様々な形での非人間的差別、暴力、侵略などの問題からも容易に理解できる。

以上の考察からもわかるように、マラマッドは *The Fixer* をとおして、人間の永久の課題である個人と全体の問題を歴史的必然性のなかで追求し、これを普遍的なものとして芸術的想像の域にまでたかめることができた。世間の底辺で、もっとも目立たない見捨てられた一個の人間が、実は、歴史的、民族的精神と深くかかわりながら一国の政局をも揺がす社会の強力な要素となって、個人の自由と尊厳を死守しようとするところにわれわれは倫理性をそなえた能動的ヒーローの新らしい姿を見出すことができる。

参考文献

Alter, Iska. *The Good Man's Dilemma* (New York: AMS Press, 1981), Chapman, Abraham, ed.. *Jewish American Literature: An Anthology* (A Mentor Book, New American Lib, 1974), Fieled, Leslie A. and Joyce W. Field. ed., *Bernard Malamud and Critics* (New York Univ. Press, 1970), Hershinow, Sheldon J.. *Bernard Malamud* (Frederick Ungar Pub, Co. 1984), Weinberg, Helen *The New Novel in America* (Cornell Univ. Press, 1970)。『アメリカのユダヤ系作家』小山田義文著（評論社 51年），テキストとして Bernard Malamud. *The Fixer* (Penguin Books 1986) を使用した。

注(1) Leslie A. Field and Joyce W. Field, ed., "Introduction," *Bernard Malamud and Critics* (New York Univ. Press, 1970), p. xvi.

- (2) Maurice Friedberg, "History and Imagination — Two Views of the Beilss Case," in *Bernard Malamud and Critics*, ed. Leslie A. Field and Joyce W-Field (New York Univ. Press. 1970), pp. 275-284.
- (3) Sheldon J. Hershinow, "Alienation and Aggression: *The Fixer*", *Bernard Malamud*, (Fredrick Ungar Pub. Co. 1984), p. 63.
- (4) Bernard Malamud, *The Fixer* (Penguin Books, 1980), p. 19. 以下引用は同じ版によるもので、英文、邦文とも本文中に頁数のみを示す。
- (5) Hershinow, p. 69.
- (6) Helen Weinberg, "The Kafkan Mode in Contemporary Fiction", *The New Novel in America* (Cornell, Univ. Press, 1970): 「能動主義」(activism) について、著者は S. ベロー、B. マラマッド、N. メイラー、P. ロス、J. D. サリンジャー、J. ボールドウィン、R. エリスンその他一連のユダヤ系作家及び黒人作家の著作をニュークリティシズムの審美主義に「反逆を起こした作品」と做す。そして、これらの作品は「人生に背を向けた審美主義小説」に反逆して「積極的に人生に立ち向う小説」の再生をもたらしたとして、これを能動主義小説と定義する。この能動主義 (activism) の原流はフランツ・カフカの不条理主義 (absurdism) にあり、能動主義主人公の精神的領域とは、意味への探求、精神的世界への探求、人間の神に対する批判の領域である。
- (7) Hershinow, p. 73.
- (8) Alan Warren Friedman, "*The Hero as Schnook*," in *Bernard Malamud and Critics*, ed. Leslie A. Field & Joyce W. Field, p. 293.
- (9) Friedman, p. 293.
- (10) Robert Alter, "*Jewishness as Metaphor*," in *Bernard Malamud and Critics*, ed. Leslie A. Field & Joyce W. Field, p. 35.
- (11) Friedberg, p. 276.
- (12) 『Bernard Malamud: *The Lady of the Lake* における Identity の追求』、中西勝之著 (調布学園女子短期大学研究紀要第19号) p. 63.
- (13) Iska Alter, *The Good Man's Dilemma*, (New York: AMS Press, 1981), p. 158.
- (14) Hershinow, p. 75.

※ 引用文中下線は筆者による。